



TITLE:

宮廷恋愛詩の詩人と聞き手：ヴァルター
ターの歌「皇帝と吟遊詩人」の解
釈を中心に

AUTHOR(S):

高津, 春久

CITATION:

高津, 春久. 宮廷恋愛詩の詩人と聞き手：ヴァルターの歌「皇帝と吟遊
詩人」の解釈を中心に. ドイツ文学研究 1980, 25: 1-30

ISSUE DATE:

1980-03-08

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184973>

RIGHT:

宮廷恋愛詩の詩人と聞き手

——ヴァルターの歌「皇帝と吟遊詩人」の解釈を中心に——

高 津 春 久

十二世紀の半ば、ドイツの宮廷におこった社交的叙情詩、ミンネザングは、それ以後の一五〇年間、モチーフと様式に多彩な変化をとげながらうたい継がれた。その多様な展開はドイツの歌謡伝統が新しいフランス系の宮廷文化を吸収し、さらに自己の立場から対応する過程の中から生まれたのである。社交詩としてのミンネザングには歌人と彼を取りまく少数の固定した聞き手の心理的關係が作品の性格を決める重要な要因として働く。歌の時代別の変化の多くは最終的にこの問題と密接につながるのである。

それぞれの歌は詩人がかなりの期間滞在した宮廷の、限られた王侯や騎士を前にしてうたわれた。そのため歌人と宮廷人のその時どきの關係を反映する要素が歌の中に入りこんでくる。例えばシュペルフォーゲルなど、初期の格言詩人は目の前の王侯に物乞いしたり徳を説いているが、これらは宮廷詩が本来特定の機会に作られる即興詩的性格をもつことを示している。しかし恋愛詩の多くは王侯への物乞いや戴冠式の奉祝歌などと異なり、語

るべき定まった機会を持たない。歌の対象は歌人の心に長らく秘められた思いであるために、歌人と聞き手の関係は、演出、隠ぺい、自己弁護などで複雑に色どられる。そしてこれが恋愛詩の重要な技巧の中に取り入れられるのである。文学作品の傾向と主張は、中世に限らず特定の聞き手や読者の上に効果を及ぼしてこそ意味を持つ。しかも聞き手に及ぼす効果は、彼らの受け入れの状況、心の準備のいかんによって決まる。作家ただ一人が働きかけて決まるのではない。ことに中世の詩に欠くことのできぬ視点は、聞き手に潜在する期待と反応、またそれを予見して語り出す詩人との相互作用のもつ意味である。

一一八〇年以前の初期の宮廷恋愛詩、読人不知の歌やデア・フォン・キューレンベルク、ディートマル・フォン・アイストなどの作品では不思議に歌人と聞き手の立場は反映されることがない。やがてトゥルバドゥールの芸術に学ぶフリードリヒ・フォン・ハウゼンがうたい出すころ、ミネザングはようやく社交詩としての意識を詩の中に表現し始める。その傾向はハインリヒ・フォン・モールンゲンの自由な空想の歌によって助長される。やがてヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデの歌の中で詩人が聞き手を批判し、嘲る痛烈な遊戯的形式をとった。ここではヴァルターの遊戯的社交詩の例として「皇帝と吟遊詩人」を解釈するが、本来彼の詩の技巧は、歴史的にその前段階を回顧して正しく評価することができる。

初期のミネザングの作品は生活と歌に対する作者の素直な喜びと関心の中から生まれた。その歌は聴衆に呼びかける言葉を持たず、歌人の心にある表白衝動がすべてである。歌が宮廷の人びとにどのように受け入れられるか、その作品がさらにどのように広められるかということに作者は何の関心も見せぬ。聞き手の前にいるのは、それぞれ現実の状況の中から素直に自分の体験を訴えている人物である。恋する王妃自ら

Ich stuont mir nehint späte an einer zinnen. (MF 8, 1)

「夜更けて私は城の上に出ていた」

と語り出し、彼女が恋人の歌を聞くこととなった状況を説明する。

Wip unde vederspil diu werdent lhte zam. (MF 10, 17)

「女と鷹狩の鷹はたやすく手なずけられる」

恋の自信家デア・フォン・キューレンベルクはこのようにうたった。直線的な強い叙述によって特殊な状況の中から恋する貴婦人や騎士がその体験を語る。個性的な恋人たちの映像は永久に詩人とも歌の聞き手とも関わり合うことなく、素描的省略によってむしろ十二分に生かされて忘れえぬ歌の主人公となっている。H・プリンクマンは初期のドイツ叙情詩のもつこのスタイルを特に「体験の文体」Erfahrungsstilと呼び、ハウゼン以後の盛期ミンネザングの新しい様式、「思考の文体」Gedankenstilから区別している⁵⁾。

一一八〇年ごろドイツ西南部、ライン河ぞいに住まう貴族たちがプロヴァンス語の宮廷詩の韻律形成やメロディーにならってフランス風の宮廷恋愛詩をドイツ語によって試みた。皇帝フリードリヒ一世の側近にあったフリードリヒ・フォン・ハウゼン(一一五〇?—一九〇)がこのミンネザングの改革運動の中心であった。初期のドイツ叙情詩の作者は叙情的告白の主人公を、多くは自分の外に客観的映像として描いたが、ハウゼンらは自らを主観的な告白の主人公とする。彼らは婦人奉仕が心に与える苦悩を仔細に独白的にうたっている。彼らの模範であったトゥルバドゥールの多くが貴い恋人を「あなた」と呼ぶより、むしろはるか離れて深い尊敬をこめ「あの方」と三人称によって呼んでいた。ドイツの詩人が彼らから学んだのはまさに貴婦人に対するこの隔りと畏敬

の心であつた。こうしてハウゼンらは恋における自分の役割を精神的、心理的事件としてモノローグの形でうたい演ずる。歌人は高貴な宮廷人に向かつて一つの高邁な恋の範例として自分の場合を語った。高潔な「そのお方」にふさわしい自分であらうと願う心の高ぶり、また恋の願いと破綻の苦しみを詩人は同僚貴族を前に訴えた。だがこれらの歌は宮廷の聴衆を意識し、彼らに直接語りかけたり同意を求める言葉を持たない。歌人が一人称によつてしかうたうことを知らぬ孤独な詩空間が、むしろ恋の悩みの痛切な表現を強めている。

Mich müet deich von der lieben quam

sô verre hin. des muoz ich wunt

beliben : dëst mir ungesunt.

ouch solte mich wol helfen daz

daz ich ir ie was undertân.

(MF 43, 1)

いととき方より遠く別れて来たことがつらい。

それゆえいまも傷は癒えず

私は病んでいる。

その人への奉仕をつねに怠らなかつたことが

今では少しのなぐさめとなつてほしい。

貴族愛好者の間に生まれた歌の、このような一人称表現にはその身分にふさわしい節度と誇りが感じられる。彼らは後の職業歌人たちの巧緻な遊戯性や多様な人称表現を知らない。ただ自らの恋の体験を訴えるそのひたむきな態度は人を感動させるものを持っている。

社交的趣味の道として貴族に定着したドイツのミンネザングはハウゼンの次の世代からうたうことを職業とする、より低い地位のものに引き継がれた。これら歌人の多くは下級騎士、ミニステリアルであった。聞き手に対する彼らの関係は同僚の間から立ちあがってうたい出す任意の一人ではない。詩人は宮廷で自分より上位の社

交集団に対立する歌の専門家と考えられる。その歌の心理は同等のものへの範例として自分の恋をうたうのでなく、詩人が詩人でないものに語りかける対立の兆しを微妙に見せ始める。長くウィーンの宮廷歌人であったラインマル（一一六〇？—一二〇五？）の作歌は彼の聴衆の批判に対立する意識でつらぬかれていた。高いミンネの精神を内省的な言葉で表現した彼はハウゼンの精神の系譜の上に立つ。しかしその聴衆との関係はもはやハウゼンの場合とちがっていた。貴婦人に対する彼の恋心の誠実を疑うものらに返す言葉、誓言と反発に彼の詩は満ちている。彼らは詩人の嘲笑者、誤解者、または味方、慰め手といった風に区分して呼ばれる。ラインマルはことに批判的な宮廷人に対して、用心ぶかく距離を保ちながら彼らを三人称で呼びつづけた。歌の論争が白熱するとき、彼は今にも二人称によって「君たち」と呼ばんばかりであるが、ウィーンの礼節を重んずる宮廷環境と彼の自制がこの最後の呼びかけから隔てていた。奉仕する貴婦人に向かつてもラインマルは二人称で呼びかけることがない。表面優雅に装われた詩人と恋人、詩人と宮廷人の間接的な関係は、やがてモールンゲンの詩のゆたかな空想性によって破られることとなる。

ハインリヒ・フォン・モールンゲン（一一五〇？—一二二二）の詩は伝統的な詩人と聞き手の隔りを最後に打ちやぶった。彼は貴婦人も宮廷の聴衆もいわば詩の遊戲の圈内に引き入れ、ここに対面の新しい広がりと自由を得たのである。彼の詩は他のミンネの歌人の及ばぬ空想の自由を持っている。架空の事柄を語る気安さが詩人の言葉から抑制をうばう。現実の社交が求める対人関係の距離や限界が忘れられるとき、遊戲の中から詩的現実や詩人の願望があらわな形をとった。このとき詩人はようやく恋する貴婦人に「あなた」と語りかける。

Nu rât eu, liebe frauwe,

いとお方、教えて下さいまし。

waz ich singen müge
 sô daz ez dir tüge.
 sanc ist âne fröide kranc.
 mir wart niht wan ein schouwen
 von dir, und der gruoꝝ,
 den ich teilen muoꝝ
 mit der werlte sunder danc.

(MF 123, 34)

モールンゲンが恋人を第三者としてうたうときは、宮廷の聴衆にかつて例のない親しさで語りかけ、彼らに自分の慕情を訴えている。

Sach ieman die frouwen
 die man mac schouwen
 in dem venster stân?

(MF 129, 14)

Ist ab ieman hinne,
 der sine sinne
 her behalten habe?
 der gē nach der schönen,

あなたのお心に適うには
 何をうたえばよろしいのでしょうか。
 歌は喜びなくては力なきもの。
 あなたが私に下さったものといえ
 ほんの一二つ。また心ならずも
 他の方がたと同席にて
 うけたまわったお言葉だけ。

あの窓辺に
 たたずむ貴婦人を
 だれかごらんになりましたか。

あのまばゆい方を見ても
 この中で正気を失わぬ
 方がおいででしょうか。
 その人は宝冠を戴いて

du mit ir krönen

gie von hinnen abe.

(MF 129, 25)

ここを出て行ったあの美しい方への
使者となってください。

ミンネザングでは画期的ともいえるこの親密さは、だがモールンゲンがはじめて生み出したものではない。これまでにも宮廷叙情詩は大きい二つの流れにそってうたわれてきた。ハウゼンやラインマルのように婦人奉仕をうたい、高揚する憧れの極致を目ざして心を集中させる芸術、トゥルバドゥールの歌のもつ憧れをドイツ的に精神化する芸術に対して、以前から北フランスの歌謡の影響を受けた娯楽的で軽快な社交詩があった。二つは並行して行われたといえる。後者の典型的なものがハインリヒ・フォン・フェルデケ（一一四〇?—一二一〇?）である。彼の歌が導入部に美しい自然描写を持つこと、恋人や歌の聞き手に対して隔りない親密な態度をとること、彼以後の宮廷詩が精神集中とともに失った多くの歌の魅力をフェルデケの歌はもっていた。彼は詩人がまだ大勢の歌声の音頭取りにすぎなかった頃の古い歌の伝統を伝える人である。人びとと共にうたうという意識からフェルデケは「われわれ」という代名詞をしばしば用いている。ミンネザングの表層を作る婦人奉仕や宮廷的な詩表現の奥に、土俗歌謡のバイタリティーがひそんでいるように思われる。これはミンネザングの精神的洗練が限界に達したとき、いつか姿をあらわす機をうかがっていたのである。高尚な抽象的な歌に向かって野卑、低俗の歌ができることといえば、大胆な遊戯によって前者の硬化した論証的思考をもみほぐし、叙情詩本来の自由な表現や心の遊びを取りもどすことである。

由来、恋人や聞き手に対する歌い手の親しくうち解けた関係は、庶民がうたう民謡、春の野にうたわれる舞踏

歌を特徴づけるものであった。また当時放浪学僧によってうたわれていたラテン語の歌 (Vagantenlyrik) も人間関係の直接性、率直な官能肯定によってミンネザングとは異質の歌謡として中世社会に行きわたり愛されていた。放浪学僧とは、必ずしも学業を放棄して身を持ちくずしたものとは限らない。詩才、教養ともに優れたものが多かった。彼らが放浪しなければならなかったのは、ただ学僧の数に比べて教会に奉職できるポストが少なかったり、学資が続かなかったからである。彼らの多くは高僧の宮廷をまわりながら歌を披露しては生活の資を得ていた。^(a) これら若き放浪者はまばゆく輝く夏の自然を、また恋の楽しさ、飲酒の喜びを、いわば僧院学校の苦しい課業を終えた解放感からでもあるうか、とにかく力いっぱい謳歌するのであった。カルミナ・ブラーナに収められる彼らの歌は宮廷歌謡に比べてはるかに軽快で自然な響きを持っている。その田園詩に登場する羊飼の女は現実の恋する女の姿態として、こぼれるばかりの魅力をふりまいている。それはあたかも人体美に鋭い古代人の感覚がはじめてとらえ得るような新鮮な描出である。彼ら学僧は放浪の途上、これら羊飼の女や田舎娘と出会い、恋をする機会もあったのでその歌のリアリズムもうなずけるのである。

Florent omnes arbores,
dulce canunt volucres;
revirescunt frutices,
congaudent, iuvenes!

(CB 141, 1a)

見わたすかぎり樹々に花咲きて
小鳥のさえずりはやさし。
低きしげみも今や萌え出ずる。
いざ、若ものら、ともに楽しまん。

ミンネザングが感性に背を向けた内省の詩であるとすれば、遍歴学僧の歌は外界に素直な喜びの目を注ぎ、同

僚を鼓舞する歌であつた。当時これら二つの異質の歌謡が並行して行われていたことに注目しておこう。

このような二つの歌の流れがヴァルターの内部で十分消化吸収され、やがて彼の芸術を支える二つの柱となつた。宮廷に滞在してはまた遍歴の旅にも出る、上下二つの生活圏に出入りした彼の生涯は、まさに二つの歌の要素を融合させるにふさわしいものであつた。初めウィーン宮廷で内省的な宮廷詩の名手ラインマルに作歌を教わり、ミンネの歌人となつた若きヴァルターは、観念的な恋の歌に不満をもっていた。やがて師の歌の方法に対立することとなる。一一九八年に新しいウィーン宮廷の君主となつたレーオポルト六世とも感情のもつれがあり、彼はオーストリーを去つた。生活の拠り所を失つた彼は、遍歴歌人としてつぎつぎ新しい保護者を求めてドイツ国内をさまよう。フライリップ・フォン・シュヴァーベン、チューリンゲン方伯ヘルマン、マイセン辺境伯デイトリヒなどの宮廷に彼は立ちよつた。この中世歌謡の天才がウィーンの宮廷詩とちがつた詩法に触れ、その文学が新しい領域に目覚めることになつたのもこの遍歴時代のことである。チューリンゲンでヴァルターはモールンゲンに出会い、おそらく彼の詩から大きい感化を受けたのである。また彼がフライリップの宮廷におもむいた頃であらう、当時ライン河流域で旅寝を共にした遍歴学僧たちの歌を知つたことは、彼にとって意味ぶかい経験だつた。やがて詩人は宮廷恋愛詩の中で、奉仕する女性の白百合のような頬にばらの紅を浮かばせ、えん然と詩人に向かつてほほえませるのである。彼の歌はこのとき詩人と愛する婦人と歌の聞き手を実体のある空間の中に住ませたのである。もはや彼の芸術は宮廷というレトリックの中で作られた純粹培養ではない。詩人が生命と暮しを賭けた遍歴の中から体得した鋭い観察、対象の急所をつく表現、さらに彼の詩を活躍させる自信にみちた遊戯性を自分のものとした。この芸術の本質は歌い手と聞き手の自由な戯れを通して、歌の主題が効果的に訴えられる

所にある。彼の恋愛詩の多くは最初の部分で伝統的な宮廷歌謡と同質であることを装う。貴婦人に対する形容詞も尊敬にあふれ、聞き手や恋人からも宮廷的に適切な距離を保っている。すると急にその隔りは取りはらわれ、二人称で呼び出されたものは劇的な形で嘲笑の矢面に立たされる。詩人は遍歴生活で身につけた無遠慮な態度で攻撃するべきものを攻撃し、宮廷文化を批判するのである。ヴァルターは遍歴中もいどこかウィーン宮廷に立ち帰りうたっている。その時彼はここの宮廷人の前に風変りな帰郷者として好奇的な視線を浴びて立っていた。ことに一二〇五年から十五年間に作られた歌は、旧態依然の宮廷人に異質の歌を披露して彼らを煙にまくところがある。宮廷住まいと放浪者という、中世人を二分する身分と生活の相違を歌の中で皮肉に対立させる。この遊戯には不敵な革命的な意図すらも感じられる。ヴァルターによってドイツの詩は同時代のヨーロッパのどのような歌謡も試みたことのない領域に踏み入ったのである。それは中世ヒエラルキーを批判し、恋愛を人間主義の立場から解放することであった。

Kaiser und Spielmann

Ob ich mich selben rüemen sol,
 sô bin ich des ein hübescher man,
 daz ich sô munge unfuoge dol
 sô wol als ichz gerechen kan.
 ein klösenære, ob erz vertrüege? ich wære, er nein.

haet er die stat als ich si hân,
bestüende in danne ein zörnêlîn,
ez wurde unsanfte widertân,
swie sanfte ichz alsô laze sin.
daz und ouch mê vertrage ich doch dur eteswaz.

Frowe, ir habt mir geseit alsô,
swer mir beswære minen muot,
daz ich den mache wider frô:
er schame sich lîhte und werde guot.
diu lère, ob si mit triuwen si, daz schine an iu.
ich fröwe iuch, ir beswæret mich:
des schamt iuch, ob ichz reden getar,
lât iuwer wort niht velschen sich,
und werdet guot: sô habt ir wâr.
vil guot sit ir, wan daz ich guot von guote wil.

Frowe, ir sit schoene und sit ouch wert:
den zwein stêt wol genâde bi.
waz schadet iu daz man iuwer gert?

joch sint iedoch gedanke fri.
 wân unde Wunsch daz wolde ich allez ledic lân :
 nû hoveschent mine sinne dar.
 waz mag ichs, gebents iu minen sanc ?
 des nement ir lichte niender war :
 sô hân ichs doch vil hôhen danc.
 treit iuch min lop ze hove, daz ist min werdekeit.

Frowe, ir habet ein vil werdez tach
 an iuch geslouft, den reinen lip.
 wan ich nie bezzer kleit gesach,
 ir sit ein wol bekleidet wip.
 sin unde sælde sint gesteppet wol dar in.
 getragene wât ich nie genan :
 wan dise næm ich als gerne ich lebe.
 der keiser wurde ir spleman,
 umb alsô wünnecliche gebe,
 dâ keiser spil. nein, herre keiser, anderswâ !

皇帝と吟遊詩人

自慢を申しあげてもよいならば、

私めに日ごろ加えられるあまたの無礼を

たしなめる力を持ちながら許している、

これぞ私が礼節を心得た男である証拠。

世をあきらめた隠者ならこれに耐えるでしょうか。無理なことです。

私ほど仕返しの機会があれば、

今私がこれほどおだやかに許すことも

隠者はほんの少しの腹立ちで

おだやかならぬ仕返しをいたすでしょう。

これやあれやのことを私は訳あって耐えております。

奥方さま、つねづね私へのお諭しに、

私めの心を悲しませる者あらば

その者に喜びを返せと、

なればその者は恥じてついに優しくなろうよと。

あなたさまの教えがまことならば、自ら実行していただきます。

あなたさまは私が喜ばすと、私めを悲しませる。

いわせていただきますが、このなさり方を恥じて下さい。

宮廷恋愛詩の詩人と聞き手

ご自分を嘘つきになさいますな。

優しくおなりなさい。それならあなたは偽りのないお方。

あなたは太へん優れたお方、ただ優れた方からは優しさをいただきとうございます。

奥方さま、あなたは美しく高貴な方。

この二つの長所には慈しみが似合います。

あなたを欲しがる者がいても、あなたに何の害も及ばぬはず。

心に想像することだけは勝手ですから。

私は望みや願いを自由に遊ばせたく思います。

すると私の思いはどうしてもあなたの心を求めるのです。

私の思いがあなたに歌を捧げようというのに、私はどうすることができましょう。

あなたはそれに目もくれぬでしょうが、

それでも私はこの奉仕から高い報酬を受けるのです。

私のほめ歌があなたの名を宮廷で高めれば、それが私の誉れです。

奥方さま、あなたはまことに高価な衣装を

お召しです、純潔の肉体という衣装を。

これ以上の衣装は見かけたことはありません。

あなたは美しく着かざったお方。

この衣装を賢さと幸せの刺しゅうが飾ります。

私は着古しの衣服をまだ人からもらったことはありませんが
この着古しばかりは生涯身につけたく思います。

こんな楽しい贈物を受けるためなら

皇帝もあの方の吟遊詩人になるでしょう。

皇帝よ、さあ、ここでうたいたまえ。いや、やっぱりよそでうたってもらおう。

第一節で詩人は皮肉な表現をえらび、ウィーン宮廷の聞き手に向かって自分の立場を弁護する。「傲慢を申し上げてもよいならば」という冒頭の句がすでに聞き手への挑戦の言葉と受けとれる。ヴァルターは宮廷に置くには慎みに欠ける男であった。法皇や君主を誹謗する彼の政治詩や、身分差にこだわらぬ恋人同志の関係を称える彼の恋愛詩は尊大にゆずらぬ気性をよくあらわしていた。高慢ちきな直言家ということで彼は通っていた。

「ここで私の欠点である傲慢が許されるならいいことがある。宮廷で私に加えられるこれほどの無礼 (un-fugel) を許していることが、かえって私が礼節ある男 (ein hübscher man) であることをよく示しているではないか。」ヴァルターが無礼であり、宮廷的礼節を学ぶべきである、といった人びとにことさら相手の放った矢の一つ一つを返すのである。⁽⁴⁾ここで「無礼」といわれるものの内容は何であろう。それは二つの事柄にかかわる。一つは詩人が別に発表した「はかなき願いの歌」に対する宮廷社会の不当な評価、もう一つはその歌を捧げられた貴婦人が詩人の願いに耳をかさぬことである。このような「無礼」を詩人が「おだやかに許し」また「耐えておる」のも「訳あって」(I 10)のことである。訳とは第二節でうたわれるように詩人を諭す奥方の言葉があったことをいう。「こんなことやらほかのことやら」(I 10)というのは詩人の心を悩ませるものが二つの分野に

わたることをいう。恋人の不当な態度に答えるのがこの詩の二、三節と四節前半であり、宮廷人に向かって自己弁護するのが一節と終節後半である。二、三、四節が「奥方さま」という共通の呼びかけに始まること、この構成の意味を明かしている。それにしても二つの方面への弁明が一つの詩に課せられて、破綻寸前の冒険を強いている。詩人は宮廷人と呼びかけ、あるいは奥方に呼びかける。モールンゲンは詩人の対面の自由をミンネザングに開いたが、ヴァルターのそれはここで放恣に近く技巧的でさえある。純粹な恋の歌が宮廷人を相手に芸術論の弁明にもふける。この内容構成の二重性が彼の詩に無類の緊迫感を与えた。折しも恋愛詩の表現法については詩人と宮廷の間に大きい対立があった。その原因となったのは、これより少し先に発表されたヴァルターの次の三詩節の歌とされている。

wânwise

Ich wil nu mêr ûf ir genâde wesen frô
 sô verre als ich mit gedanken iemer mac.
 ichn weiz ob allen liuten rehte si alsô :
 nâch eine guoten kunt mir ein sô boeser tac
 sô ich ze frôuden niht enkan :
 sô troestet waenen : des pfâc ich
 von kinde gerner denne ie man.
 in ruoche wer mîn dar umbe lachet :

zewære wünschen unde wænen
hât mich vil dicke frô gemachet.

Ich wünsche mir sô werde daz ich noch gelige
bî ir sô nâhen deich mich in ir ouge ersehe
und ich ir alsô volleclichen an gesige,
swes ich si denne frâge, daz si mirs verjehe.
sô spriche ich ' wiltus iemer mê
beginnen, du vil sælic wîp,
daz dû mir aber tuost sô wê? '
sô lachet si vil minnecliche.
wie nû, swenne ich mir sô gedenke,
bin ich von wünschen niht der rîche?

Min ungemach, daz ich durch sie erliten hân
swenn ich mit senenden sorgen alsô sêre ranc,
sol mich daz alsô kleine wider sie vervân,
hân ich getrûret âne lôn und âne danc,
sô wil ich mich gehabt baz.
waz ob ir fröude lieber ist

dan trüren si, ich wünsche ouch daz.
und sint ir denne beide unnnære,
sô spilte ich doch des einen gerner
dan jens daz gar verloren wære.

(184, 1)

はかなき願いの歌

これからは物思いの許すかぎり

その方の慈しみをあてに楽しくしたい。

誰も同じなのかも知れぬが

私はよい日があるときまって次は

心楽しまぬいやな日になる。

そんなときは想像が慰めてくれる。

幼いころから誰よりも私はそれを好んだ。

そんな楽しみを人から笑われてもかまわない。

まこと願いと望みこそ

いくどか私の心を楽しませた。

私の楽しい願いはあの方のかたわらに

その目にわが顔の写るばかり身近にねること。

また私があの方に勝ったあと、

こちらがたずねることすべてをあの方がうべなうこと。

「幸せな方、

また私を今までのように

苦しめるおつもり」とたずねると

その人はじつに美しいほほ笑みを見せる。

どうです、このように想像を描けば

願いによって私は幸せになれたではありませんか。

あこがれの悩みに悶えるたび

その人のためにこうむる私のつらさ、

それがあの方の心を得るのに何の役にも立たぬなら

報酬も感謝も受けずただ悲しんでいたのなら

いっそ別の楽しいことをしよう。

その人にとっても悲しむより

楽しむ方がよいはず。私の願いも同じ。

もしその人が悲しみでも楽しみでもよいといえば

無駄に終らぬ方の楽しみを

私はこれからしていきたい。

宮廷恋愛詩の詩人と聞き手

「はかなき願いの歌」 wânwise とは貴婦人を思い、かなわぬ願いを想像の楽しみで色どり、喜びにひたる空想歌である。後期ミンネザングでは空想の喜びに意味の重点がおかれ、これが「嘆きの歌」 klage liet や「論争歌」 swindeli et に対する歌謡ジャンルの名称となる。⁽⁵⁾ ヴアルター以前の詩人、ラインマルやモールンゲンにもこの傾向の詩はある。しかしヴァルターの願いの歌はあまりにも現実的映像に近いために宮廷人には危険なものと感じられた。ことに第二節は空想に淫することはなほだしい。「恋人の目にわが顔の写るばかり身近に」はこれまでにない奇抜なりアリズムであり、「わたしがあの方に勝ったあと」の閨房の二人の語らいと仕草の描写は、宮廷文学では許されなかった領域に筆を進めたといえる。「まこと願いと望みこそ詩人の心をしばしば楽しませた」のである。この詩人の空想を人びとは悪意に解した。そこに彼らは自分たちとは異なる生活領域に由来するものを感じとり、不気味に思ったからである。精神的ではあってもリアルな官能から遠い詩、かそけきこおろぎの鳴声のようなラインマルの歌に慣れた耳に、この卑俗な空想の詩は自分たちの冷静な精神に対立する何かであると感じられた。今ヴァルターの前に居ならぶのは、美しい城館の奥深く、その挙止は宮廷風に洗練され、宮廷詩人がうたう理想の愛、おだやかな詩句の文目に日ごと酔っていた人びとである。彼らにうたって聞かせる詩人はいえば持ち前の激しい気持が身の仇となり、このような安穩な生活圏を追われ、ただ一人城館から城館へとわたり歩き、貴族の気まぐれな愛顧にすがって不安な日を送っていた。冬の暖炉の火も宿無しは、当夜の主人の目をうかがいながらそっと手をかざすものである。夜はわざとおくれて宿に着き、早朝には早く旅立つ。これも放浪者の主人に対する遠慮からであった。⁽⁶⁾ 食うや食わずの日、馬もなく杖にすがっての旅、冬の寒気は詩人の足指を容赦なく苦しめたはずである。⁽⁷⁾ このような苦しい生活の中から、安逸の生活を享受する人びととその固陋の

芸術に対する反目が自然と生まれてきた。彼の詩が中世の階級差別に対する批判を宿しているのも、その窮亡放浪の旅を通してそれが胸にたくわえられたものと思われる。彼は高貴な奥方への無条件な奉仕に代って、身分に係わりなく心優しく魅力的な女性を恋の相手とすることをうたった。美しい自然の中での異性との自由な出会い、恋の戯れ、宮廷恋愛詩がこのような素材に背を向け、恋の思索の迷路に入ってからどれだけ長い時間が経っていただろう。ヴァルターの恋愛詩が目覚ましい男女の出会いを描き出したことでもそれはミンネザングの大きい改革であった。しかしウィーンの宮廷人たちの反応は冷たかった。ヴァルターは彼らから紀律と節度ある作詩を改めて求められた。「はかなき願いの歌」が発表されたときの宮廷人の悪意ある反応をうかがわせる詩が一つ残されている。ヴァルターのいわゆる「防御の歌」である。

Abwehr

Ich wil niht mē ûf ir genāde wesen frō.
Mir ist mīn êrre rede ennitten zwei geslagen :
daz eine halbe teil ist mir verboten gar :
daz müezen ander liute singen unde sagen.
ich sol ab iemer mīner zūhte nemen war
und wūneclīcher māze pflegen.
umb einez, daz si heizent zūht,
lāz ich vil dinges under wegen :

宮廷恋愛詩の詩人と聞き手

enmag ich des niht mē geniezen,
stêt ez als übel âf der strâze,
sô wil ich mine tûr besiezen.

Owê daz mir sô maneger missebieien sol!
daz klage ich hute und iemer rehter hovescheit.
ir ist doch lûtzel den ir schapel stê sô wol,
er enfünde im ouch ein harte swerendez herzeleit
und wære er von ir anderswâ
wan dar ich gernde bin. daz ist
der schade: er wære ouch gerne dâ.
des muoz ich missebieien liden.
jedoch swer sîne zucht behielte,
dem stüende ein schapel wol von siden.

(61, 32)

防御の歌

(その方の慈しみをあてにもう楽しんでなどいたくない。
私の先の歌はあわれ真二つに引きさかれた。

その半分をうたうことは禁じられた。

かような歌は宮仕えする歌人の作るまじきもののとの仰せ。

私はいつもたしなみを忘れず

優美な節度を守らねばならぬと。

たしなみというものの一つを守るため

私は多くのものを捨てている。

このように慎んでも宮廷で評判がよくならず、

かといって旅の歌人でもないけないというのであれば

もう家の戸を閉めてどじこもう。

悲しいかな、これほど多くの人が私を非難するとは。

まことの宮廷の礼節を心得た人にこれを永久に訴えたい。

だがまことに雅やかな人の中でもあの方ほど髪飾りのよく似合う人はない。

その方は私が望んだほど

身近に居なければ

誰しもきつい胸の痛みを感じるほどの美しさ。

離れているのは苦しいから、誰しもその方のそばに居たいはず。

そのため私は人から非難をうけねばならぬが、

たしなみ深い人には

絹の髪飾りをいただく人が似合いであろう。

宮廷恋愛詩の詩人と聞き手

この歌は意図を含んだ言葉使用が多い。注釈を必要とする。「私の先の歌はあわれ真二つに引きさかれた。」つまり「はかなき願いの歌」の、特にけしからん真中の詩節を人びとは詩人に禁じたのである。「かような歌は宮仕えする歌人の作るまじきものとの仰せ。」この野蛮な空想歌は宮廷詩の伝統の外にある放浪芸人の戯れ歌と性質を同じくすると宣告された。つまりこの歌は宮廷詩のあり方についてウィーンの宮廷人とヴァルターの対立を主題とする、芸術論争の詩である。ヴァルターがその乱暴な歌で宮廷文化の優美な調和を一人乱すことのないよう求められたとき、あえて彼は「たしなみというもの一つを守るため、私は多くのものを捨てている。」と返している。彼の反論の主旨はこうである。自らの心の悲しみを表さず、人前に出では楽しい歌をうたい、宮廷の喜びを高めてこそ「たしなみ」*zucht*や「宮廷的礼節」*höfischeit*に適う行為といえる。自分の作詩は正しくこの規範にそっているではないか。頑なな貴婦人に拒絶されたまことの喜びに代って想像の喜びにふけるのは、悲しみを殺し喜びの歌をうたうことではないか。詩人の主張はここでも逆説的であり、宮廷人の予期しない新しい宮廷的節度を説いている。本当は取り乱して悲しみの歌をうたいたい、それをこらえ想像の喜びをうたって宮廷的に振るまおうとしている。こうして慎んでいるのに宮廷での私の歌の評判は一向によろしくない。そこで宮廷風をあきらめ遍歴歌人の流儀で礼節にかなう歌を試みると、これも「粗野」ということで評判がよくない。これでは「もう家の戸を閉めてとじこもう。」私は願いの歌はおろか、怒りの歌、喜びの歌、悲しみの歌の何も作らず沈黙したい。

自己弁護の第一節のあと、彼は第二節で攻撃に転ずる。「まことの宮廷の礼節」とは人びとがいわゆる「宮廷の礼節」の立場から放縱な空想の詩を難じたのに対して、自分の悲しみに耐え、人びとのため楽しい歌をうたう

ことを眞の礼節とする立場をいう。ところでそのようなことの雅びを心得た人の中でも私が愛する人ほど花冠がよく似合う人もあるまい。私はかつて「その人の目に自分の姿が写るほど」とうたったが、誰しもあの方にそこまで接近しなければ憧れの苦しみを癒やすことのできぬほど美しい人だ。自ら礼節をわきまえたという人なども、あの人から離れていてはつらいに違いない。詩人がその人に憧れることを非難した者自身、身もだえて憧れている、というこの部分が攻撃の詩節の中心である。だから私に宮廷的節度がないという非難は、私が美しい人を恋していることへの妬みから出ているのだ。だが私のように本当の節度を守っているものには、最も高価な髪飾りをつけているあの美しい人が恋人として似合いであろう。こういつて詩人は女性ゆえの妬みから出た論敵たちの非難をたしなめ、自分は宮廷的礼節を十分心得ていると反論し、自分の恋の願望はかなえられてしかるべきだという。

「皇帝と吟遊詩人」はこれだけの応酬が詩人と聞き手の間にあった後で作られた。いま再びこの歌の表現を先の二つの歌と比較しなければならぬ。これら三つの歌は時間的にもかなり接近して作られたものか、用語に深い関連がある。この関連を明らかにすれば、詩の成立に係わる詩人と聴衆の対立関係も最終的に見きわめることができる。

まず「皇帝と吟遊詩人」に「私に日ごろ加えられるあまたの無礼を許しているから、自分は礼節を心得た男(ein hübscher man)である」(I 2, 3)といったのは、先の「防御の歌」に「まことの宮廷の礼節を心得た人(rechte höfeschheit)」(II 2)とあるのを聞き手に想いおこさせる。「今私がこれほど(also) おだやかに許す

ことも」(I 9)という詩句で特に「これほど」と断るのは「防御の歌」で「家の戸を閉めて」(I 10)歌をあきらめるといったのを指している。また奥方に向かつては「優しくおなりなさい」(II 9)と、「あなたはそれには目もくれぬでしようが、それでも私はこの奉仕から高い報酬(vil hohen danc)を受けるのです」(III 8, 9)というが、これは先の「はかなき願いの歌」の「その人のためにこうむる私のつらさ、それがあの方の心を得るのに何の役にも立たぬなら、報酬も感謝も受けず(ane danc)……」(III 1-4)と照応し、宮廷人にこの歌が先の論争内容を引きつぐことを示している。また「この二つの長所には慈しみ(geñade)が似合います」(III 2)とあるが、これは「はかなき願いの歌」を「その方の慈しみ(geñade)をあてに楽しくしていたい」(I 2)で始めたのを改めて強調する。この歌と「はかなき願いの歌」の間に作られた詩句の呼応はかなり多い。その中で最も明白なものは「私は望みや願い(wân unde wunsch)を自由に遊ばせたく思います」(III 5)と「はかなき願いの歌」の「まこと願いと望みこそ(wünschen unde wenen)いくどか私の心を楽しませた」(I 9)の照応であり、論敵に立ち向かう詩人の執念を感じさせる。そのような観点から「私のほめ歌があなたの名を宮廷で高めれば」(III 10)というのは防御の詩でヴァルターを旅の歌人と呼んだ(I 8)ものたちへの強い反撥を示している。

これら三つの歌の間で宮廷の歌人と旅の歌人、望みと願い、まことの礼節、また貴婦人の慈しみなど詩人と宮廷の聞き手にとって争点となったテーマ用語を繰り返している。一つの詩の中で語を照応させる(respondieren)より、異なるいくつかの詩の間で一定の詩句が呼応する方が聞き手を刺す攻撃力ははるかに大きい。この際時をへだてて仕掛けてくる詩人の執念は空恐ろしいものを持っている。元来、宮廷詩の聞き手はよき鑑賞者

として離れた詩行の押韻箇所や意味深いテーマ用語の反覆、呼応に対する優れた聴覚を求められる。ウィーンの宮廷にはおそらく第一級の聞き上手が集まっていたと思われる。彼らは鋭敏な耳を持つためにかえって詩人の差し出す苦杯を存分に嘗めることとなった。これを遊戯と呼ぶなら、聞き手にとって強いられたこの上なくつらい遊戯であった。

しかしこの歌で最も衝撃的なのは皇帝その人を自分の歌の聞き手として呼び出す結びの二行である。この詩の終節には手のこんだ連想や皮肉や自己弁護が集中してあらわれる。詩人はここで恋人の肉体をぜひ身に着きたい高価な衣服 (IV 1-6) にたとえている。それによって「防御の歌」の「たしなみ深い人」には絹の髪飾りをいたたく人が似合いであろう。」 (II 8, 9) の「たしなみ深い人」が詩人その人を指すことをあらためて思い起こさせる。この言葉に関連して詩人は自分は誇り高く「着古しの衣服をまだ人からもらったことはない。」 (IV 6) という。これによって「防御の歌」の「かような歌は宮仕えする歌人の作るまじきもの」 (I 3) という人びとの批判を論破するのである。およそ遍歴歌人の中で身分低いものに対しては、歌を聞いた貴族が着用の古着を与え、上級の芸術家と見られる者には新調の衣服か反物が贈られるという区別があった。⁽⁸⁾「着古しをもらったことがない」という言葉はヴァルターの空想的な歌が大道芸であるという批判を正面から否定する。しかしそれではまだ言い足りない。「こんな楽しい贈物を受けるためなら皇帝もあの方の吟遊詩人になるでしょう。」「はかなき願いの歌」のうたいぶりは、さながら「別の人たち」 *ander lute* のうたい方であると宮廷人はいった (防御の歌 I 3)。「別の人たち」が吟遊詩人のことであることはまだ伏せられていたが、始めてここで明かされる。しかもあれほど美しい衣装 (肉体) が引出物なら皇帝自身いやしき吟遊詩人になるだろうという。厳然たる階級社会の頂点に

座る人（皇帝）を底辺（吟遊詩人）に引き降ろそうという、遊戯を装う詩人の意図には太々しい真面目さも感じられるのである。⁽⁹⁾ この短い詩句によって吟遊詩人の芸を落としてめてならぬことが警告されるだけではない。貴婦人への奉仕、本能の営みにかけては皇帝さえ最下等の人物と同列にあることを主張する。ヴァルターの詩句の一つ一つは宮廷風優雅の賞讃と人間本能を直視する立場の間で動きつづける。「この衣装を賢さと幸せの刺しゆうが飾ります」と奥方の精神を称えれば「この着古しばかりは生涯身につけたく思います」と奥方の所有を願っている。

「皇帝よ、さあここであうたいたまえ。いや、やっぱりよそであうたってもらおう。」この歌が一二二二年、またはその翌年に時の神聖ローマ帝国皇帝オットー四世の面前であうたわれたとするヴィルマンズの推測が事実とすれば、結びの詩句の効果は大へんなものであったろう。最後にヴァルターは皇帝に向かって彼が吟遊詩人としての技倆をためすように要求する。しかし一瞬思い返して、できれば他の場所で演奏してくれと頼むのである。詩人は皇帝が恋のライバルであることを好まぬからである。このような滑けい味と共に、この詩句は詩人の強い自負心も表わしている。「詩人の職分は私だけのものである。皇帝の権力と能力もこの領分には通用しない。」というのである。吟遊詩人の芸を非難されたヴァルターは、この詩の中で自分が吟遊詩人であることをぎっぱり否定した。そのあともう一度吟遊詩人になってみせこの詩のさげをうたう。詩人自ら歌の中で吟遊詩人になったり、それであることを否定する遊戯は、彼の歌が宮廷芸術といえるかどうかという、歌の中心テーマを皮肉な形で示している。勿論これほど無遠慮な皇帝に対する言葉は、虚構された吟遊詩人としていわれたために許されるのである。それも詩人が計算したこの仮面の利点である。道化や身分低い芸人は宮廷でとくに無礼御免の特権をもって

いた。高貴の人びとに対する辛らつな語りかけも分別なき馬鹿者のいうことであるから、座を沸かせる適度な刺激として許されたのである。三つの詩の關係は、論敵たちの批評が詩人を少しもへこませることができず、ます彼をほしきままにうたわせる結果に終わったことを示している。はじめ彼は「はかなき願いの歌」によって恋人の所有を夢み、宮廷人を怒らせたのだが、彼はそれを無視してこの歌の最後の詩節で彼女の肉体を再び強く求めるのである。

〔注〕

- (1) Hennig Brinkmann, *Liebeslyrik der deutschen Frühe in zeitlicher Folge*. 1952. S. 64 ff.

これとならんでシンネザングの歌人と聞き手の關係について筆者に有益な視点を与えてくれたものとして次の論文を挙げたい。

- (2) Wolfgang Mohr, *Minnesang als Gesellschaftskunst*. Deutschunterricht 6 (1954) H. 5, 83-107.
数少く例外として MF 161, 26; 171, 1, 2 を挙げておきたい。

- (3) Hennig Brinkmann, *Die Dichterpersönlichkeit des Archipoeta*. GRM. Bd. 13 (1925) S. 103 f.
第一節のヴァルターの言葉が宮廷人に対する自己弁護でなく、アキレーアの僧「トマシン・フォン・ツィルクレー」が教訓詩《*der welsche Gast*》の中で彼を批判したのに答えるものとする意見もある。

Karl Kurt Klein, *Zum dichterischen Spätwerk Walthers von der Vogelweide*. Innsbrucker Beiträge zur Kulturwissenschaft, Bd. 6 1959. S. 89.

クラインによれば第一節に現れる隠者はトマシンのことである。第一節を特殊な個人に向けられた詩節と見るとき、第二節以下との断層が大きくなるので、この見方を私はとらない。それぞれの字句の読み方で本稿はむしろ Carl von Kraus, *Walthar von der Vogelweide*, Untersuchungen. 2. Aufl. 1966.
に恩恵を受ける所が多い。

- (5) Ulrich von Liechtenstein, Frauendienst, hrsg. v. Reinhold Bechstein 1888. 2 Teil S. 148.
 (6) Gerne wolde ich, möhte ez sin, bi eigenem fure erwarmen. (28, 3)
 Sus kume ich späte und rite fruot, 'gast, wê dir, wê i!' (28, 8)
 (7) Nû enfirhte ich niht den hornunc an die zêhen. (28, 32)
 (8) Konrad Burdach, Reinmar der Alte und Walther von der Vogelweide 1928. S. 131.
 Alwin Schultz, Das höfische Leben zur Zeit der Minnesinger 1889. Bd. I. S. 566.
 (9) Der keiser ist in allen landen, すべいの國々を支配する皇帝じやそ
 kust er si zeiner stunt そのひとのくれないの唇に
 an ir vil rôten munt, 接吻することがあったとすれば
 er jæhe ez wære im wol ergangen. 自分は幸せに恵まれたといわずにおれぬひと。

(MF 49, 17)

おそらくヴァルターの脳裏にはミンネザングの「思考の文体」の最初の確立者、ハウゼンのこの一節があったに違いない。内容的にきわめて近いものであり、ハウゼンも皇帝フリードリヒ・バルバロッサの前でこの歌を誦したとされる。しかしハウゼンが自分の恋人の美しさを称えるために、敬愛をこめて皇帝を引き合いに出すのに比べ、ヴァルターの皇帝オットーへの言葉は何と辛らつなものであろう。詩人はオットーを歌の中ふかくに引き入れ、悪意ある言葉でともに演技するよう命じるのである。ヴァルターはこうしてかなり遠い別の歌人の言葉までも聞き手が想起することを求めつつ、自分の詩句の独自性を印象づける。

- (10) Walther von der Vogelweide, hrsg. u. erklärt von Wilhelm Wilmanns. 4 Aufl. besorgt von Victor Michels. 1924. Bd. I S. 185; Bd. II S. 248.

ヴァイルマンズのこの解釈によれば、詩人はウィーン宮廷でこれをうたわなかったことになり、彼とウィーン宮廷の対立関係の中にこの歌を置くことができなくなる。その点でヴァイルマンズ説は考慮を要する。